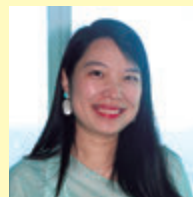


# 古代における日本の文献を探る道

姚 瓊

(浙江工商大学東亜研究院)



今回、「平安時代における攘疫儀礼研究」というテーマで非文字資料研究センターの訪問研究員制度に応募申請しました。滞在期間はわずか二週間でしたが、指導教員の小熊誠先生と非文字資料研究センター諸スタッフのおかげで、調査予定の文献史料を多く手に入れることができました。

「平安時代における攘疫儀礼」を記録する文献史料と言えば、主に『大日本古記録』『平安遺文』が挙げられます。今回の研究目的は『大日本古記録』に載っている「攘疫」に関連がある史料を収集することです。二週間の滞在での収穫は、神奈川大学図書館、歴史民俗資料学研究科の資料室と日本常民文化研究所の図書室を利用し、40種類の史料を集めたことです。これらの史料を通して、特に平安貴族による攘疫の手段を理解できるようになりました。

『大日本古記録』における貴族攘疫の記録によると、平安時代の貴族たちは疫病に対する特別な恐怖感を持っており、疫病の罹患を防ぐために、日常生活の中で常に陰陽師の占いを求めているということです。例えば、藤原実資の日記『小右記』には、永祚元年(989)6月22日に、「去十九日賀茂上社御前大櫻木俄以顛倒之間、大星出自木心云云、於藏人所有御占、兵革・疫氣徴云云、可有軒廊占敷如何」<sup>1)</sup>との記録があります。この記録により、藏人所で占いが行われていたことや、兵革や疫病があったことが分かりました。また、同じく『小右記』には、長和4年(1015)6月19日に、「右衛門(藤原懷平) 督從内告送御薬事子細案内、問遣資平件事、云、吉平(安倍) 占申、云、疫鬼御邪氣為出宗(崇)者、明日・明日日物忌也、今夕可参入乎否由示遣(後略)」<sup>2)</sup>との記録があります。この記録により、安倍吉平が占いを通して、疫鬼が祟って現れたと認識していたことが分かりました。以上の記録から、平安貴族は疫病を防ぐため、常に陰陽師に占ってもらっていたことが理解できました。

また、疫病が発生した場合、攘疫手段として貴族たちは読経、仁王会、修法、四角四堺祭、鬼気祭などを行っていました。具体的な事例から見ると、藤原忠平の日記『貞信公記』に、承平2年(932)4月26日、「有直物、定為攘疫気、令諸寺読経、于来月四日可始」<sup>3)</sup>とあり、攘疫のために諸寺に命じて読経するとの施策を

行っていた。仁王会の事例として、天曆2年(948)5月5日、「召御前、還着、示諸卿云、日来炎旱重日、疾疫間聞、因之可行仁王会事」<sup>4)</sup>と記されており、炎熱、旱魃や疫病流行の時期に仁王会を行っていたことが分かっています。また、修法の事例として、長保3年(1001)3月10日に、「壬午、自今夜為攘疫癘災、於宮中五か所、被修(彼)不動法」<sup>5)</sup>とあり、攘疫のため、宮中の五か所で不動法を執り行っていたことが分かっています。四角四堺祭の事例として、寛仁4年(1020)12月3日、「昨諸陣直口(官)人等可令問者、又云、疫癘往々有聞、仍可被行四角四堺祭者」<sup>6)</sup>と記されているように、疫病が流行していた時期に、四角四堺祭が行われていたことが分かっています。最後に、鬼気祭の事例として、長元元年(1028)12月22日に、「鬼気祭、(漸)復尋常、令聞案内、似時(疫)(後略)」<sup>7)</sup>との記録があり、時疫が発見された時に鬼気祭が行われていたことが分かっています。

以上の文献史料を通して、平安貴族は疫病を防ぐために、常に陰陽師に占いをを用いるよう、また攘疫の際には仏教と陰陽道の儀礼を利用していたことが分かりました。今回の非文字資料研究センターでの滞在期間に、研究テーマに関する多くの史料を集めることができ、収穫も多く、大変有意義な時間を過ごしました。最後になりましたが、資料収集に協力していただいた成田紅音さん、チューターの王麗さん、研究テーマに関して多くのアドバイスをいただいた小熊誠先生、佐野賢治先生に深く感謝を申し上げます。



写真1 指導教員の小熊先生から記念品をいただく

1) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録第10小右記1』岩波書店1959年pp.186-187  
 2) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録第10小右記4』岩波書店1967年p.41  
 3) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録第8貞信公記1』岩波書店1956年p.155  
 4) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録第9九曆』岩波書店1958年p.8  
 5) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録第10小右記11』岩波書店1986年p.63  
 6) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録第10小右記5』岩波書店1969年p.259  
 7) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録第10小右記8』岩波書店1976年p.117